



Emergency Watch NO. 42 June, 2014



神戸こども初期急病センター 2014年5月受診者数：2775人

訴え

- 1. 発熱 : 1600人 (1248人)
- 2. 咳 : 1191人 (310人)
- 3. 鼻汁 : 970人 (26人)
- 4. 嘔吐 : 629人 (344人)
- 5. 下痢 : 377人 (85人)

(カッコ内は、その症状を主な訴えとして来院した患者数)

疾患頻度

- 1. 急性上気道炎・咽頭炎 : 793人
- 2. 感染性胃腸炎 : 564人
- 3. 気管支喘息・喘息性気管支炎 : 195人
- 4. 気管支炎 : 172人
- 5. じんま疹 : 125人

☆ 今月のワンポイント ☆

6月に入りだんだんと日差しが強くなってきました。5月の受診患者さんの数は4月より780人増えて2775人でした。疾患の頻度では前月と同様に急性上気道炎・咽頭炎と感染性胃腸炎が多く見られました。季節の変わり目に多い気管支喘息の患者さんは増えることはなく、前月とほぼ同数でした。

今回は夏に多い感染症について述べてみたいと思います。毎年夏に流行するものとして、以下のようなものがあります。

- ① ヘルパンギーナ：乳幼児に多く突然の発熱で始まります。38-40℃まで上がることもあります。また、嘔吐や頭痛を伴うこともあります。口の中、特に喉の奥に小さな水ぶくれや潰瘍ができ、かなりの痛みを伴い食事や水分を全く摂れなくなることもあります。症状は2-4日間程度続きます。そのままだと水分が不足し、脱水になることがありますので、おしっこの量が減ってきた、ぐったりしてきたなどの症状があれば医療機関を受診するようにしてください。水分摂取を積極的に行い、食べ物については本人の好きなもので、プリン・アイスクリームや冷たいポタージュスープなど、のど越しの良い、しみないものを与えるようにしましょう。またくしゃみや咳を介して、大人でもかかることがありますので、日頃からの手洗い、うがいを徹底しましょう。
- ② 手足口病：ヘルパンギーナと同じように、口の中にぶつぶつが出来ます。ヘルパンギーナとの違いは、病名にもついているように、熱が出てから2-3日で手のひら、足の裏にもぶつぶつが出来ることです。症状は3-7日程度続きます。発熱の程度はヘルパンギーナに比べると軽いとされていますが、3年ほど前には高熱を伴い、ぶつぶつの広がり方もひどい手足口病が流行したこともあり、注意が必要です。また、時にのどの痛みがかなり強くなり、水分が摂れなくなるお子さんもいます。症状が強くなってきた時にはヘルパンギーナの時と同様の対応をしてください。幼稚園・保育園など集団での活動時に広がりやすいので、日頃から子どもの身体の様子を観察するようにしましょう。
- ③ 咽頭結膜熱（プール熱）：アデノウイルスによる感染症で、プールでの子どもから子どもへの感染が多いことからプール熱と呼ばれていますが、プール以外の場所でも感染することがありますので、注意が必要です。発熱・のどの痛み・目の充血が主な症状です。症状は3-5日続きます。感染力が強いため、症状が消えてから2日間は登園・登校停止になります。

これら3つの感染症は、いずれもウイルスが原因となるため、抗生物質は効果がなく、熱を下げる、痛みを取る、脱水を防ぐなどの対症療法が主な治療となります。

この他に、抗生剤が効く感染症としては、次のものがあります。

- ④ 伝染性膿痂疹（とびひ）：虫刺されやあせも、湿疹などに細菌が感染して水ぶくれやかさぶたを作ります。これを掻いて壊すと手を介して細菌が他の部位に感染するため、「とびひ」と呼ばれます。抗生物質を使用するとともに、身体を清潔に保ち、水ぶくれを乾燥させることが重要です。水ぶくれがかさぶたになるまでは登園・登校停止となります。熱が出たり、顔や身体が赤く腫れてくる場合には、すぐに受診するようにしてください。

これからどんどんと暑くなっていくと汗をかいてあせもや湿疹が出来やすくなり、また室内外の温度差から夏バテにもなりやすくなります。体力が落ちますとこれらの感染症にもかかりやすくなり、また治りにくいということにもなります。子どもには普段から規則正しい食事・バランスのとれた栄養の摂取・十分な睡眠を取らせることが重要です。また、日頃からの感染予防対策として、帰宅時、食事前のうがい・手洗いを積極的に行うようにしましょう。